



ピヨピヨ

田中かわず

ピヨピヨ

1

今日び、立ち呑み屋は、全国、どこに行ってもあるやろけど、あんた、ここ大阪がその発祥の地言うこと知ってるか。

酒屋さんが軒先で、するめやピーナッツなんかの乾きもんを酒と一緒に客に提供したんが事の始まりで、これを酒屋付属型立ち呑み言うんやけど、それが酒屋から独立して居酒屋なんかとおんなじにいろんな当てを出すようになったんや。立ち呑みは安うて手頃やからな。今や、大阪は立ち呑み天国やで。

立ち呑み言うたら、小汚い格好した労務者が酒屋の軒先で安酒を煽ってるイメージが強いけど、梅田桜橋の商社オフィスビルの近くにな、「忘れな草」言う名前の立ち呑みがあって、肩を入れ合うたら、そうやなア、14、5人が立ち宿れるくらいの店なんやけど、そこ行くとな、近くの商社の若いオフィスレディーなんか一杯入ってて、それは華やかやで。それに当ても旨うて、今日びの立ち呑みは進化してんなアて感心してしまうわ。

ご主人様も立ち呑みが好きでな、勤務先が代わる度にその近くで立ち呑み屋を探しては通うてはる。ご主人様の場合は誰かを誘うて行くんやのうて、たいがい、1人やねん。立ち呑み言うところは不思議なとこでな。初めての客同士でもすぐに打ち解けてわいわいがやがや話が盛り上がる。三文話の洪水や。

そんな三文話も、ええ酒の当てになる。ご主人様には、1時、そんな三文話や与太話を集めて出版したいと考えてた時期があつた。こっそりテープレコーダーを店に持ち込んで、家に帰ってそこで聞いた話を文章に起こすんや。けど、しばらくそんなこと続けてるうちに、なんかアホらしゅうなって止めてしまいはった。

と言うんも、酒の上の与太話、三文話は、その場所、その雰囲気の中でこそおもしろいけど、それを文字にして字面だけ読んでも、ちっともおもしろないことに気付きはったからなんや。要するに雰囲気、臨場感が与太話をおもしろうにする大事な要素言うこっちゃな。

そんな訳やから、今はご主人様の記憶や記録に残ってる話はあるまいけど、今日はな、天王寺の立ち呑み「備前屋」で、ご主人様が聞いて強烈に印象に残ってる与太話を、特にあんたに聞いて欲しいんや。

その前にちょっと、ご主人様夫婦のなれそめについても話しとこか。と言うんもご主人様と嫁さんが知り会うたんも立ち呑み屋やからな。

あれは5年前、ご主人様が池田支店に転勤したときのことや。駅前に「よってや」言う名のU字型のカウンターに鈴なりに肩を入れたら、14、5人が立ち宿れる立ち呑み屋があつてな。ママと呼ばんと気分を悪うする50がらみのおぼちゃんがやってる、おふくろの味が評判の店なんやけど、ここに午後の6時から8時くらいまでの忙しい時間帯、ママの従兄弟のあっちゃんが手伝いにきてたんや。

ご主人様は、転勤初日にこの店を見つけて、勤務3日目の仕事帰りに1人で入りはった。そんで湯豆腐を当てにビールを1本飲んだ後、焼酎の湯割りを注文しはった。

「焼酎の湯割り、くれる？」

「芋にしはる？ それとも麦？」

「芋で頼むわ」

「レモンか梅、どっちか入れます？」

「メロンで頼むわ」

これがあっちゃんに大受けした。これはときに、ご主人様が受けを狙うて使う技なんやけど、その頃はあんまりこの技で笑いはとれんようになってた。きつとご主人様の表情や立ち居振る舞いにこれで笑いを取ろう言う魂胆が見え隠れしてたんやろな。

この日は意図して言うたんやのうて自然にそれが言葉になったんがよかった。あっちゃんは、ご主人様が何か気恥ずかしゅうなるくらい腹抱えて笑うてな。これがご主人様とあっちゃんの初めての出会いやった。

それから、ご主人様は「よってや」に頻繁に通うようになった。あっちゃんは機転がようきいて受け答えの会話に華があつたから店の人気もんやった。少し細身でさらさらした髪とシャキシャキした立ち居がいつも軽やかでな。狸顔か狐顔のどっちか言うたら明らかに狐顔で、べっぴんさん言う訳やないが笑顔のかわいいとこが、ご主人様は特に気に入ってはったんや。

ご主人様とあっちゃんが一緒になるきっかけになったときのこと話とこか。

ある寒い日のことやった。ご主人様があっちゃんに声をかけたいんを我慢しながら1人黙ってビールを飲んでたら、向かいのカウンターの常連客のひとりから「あっちゃん、若いのにえらい今日は厚着やな。風邪でもひいたんか」という声がして、これに「そうやないけど、私、寒いんに弱いんよ。今日は、ババシャツも着てるねん」とあっちゃんが受けた。そんでご主人様はこう言うたんや。

「乳バンドはちゃんとしてるんかいな」

「そりゃア、当然よ。そうじゃないとすれていたいやん」と返すのはあっちゃんや。

「よう言うよ。おっばいよりおなかの方が出てるんちゃうか」と誰かがからこうたら「失礼ね。

おっぱいは小さくても美乳だからええんよ」とあっちゃんも負けてへん。

そこにママが割り込んできてな。

「あっちゃん、そんなに若いんに、なんでババシャツなんか着てるん。私でも着てへんのに」と言うたら、あっちゃんがこう切り替えして、皆が大笑いや。

「ママには脂肪があるやん」

ご主人様は、その頃、少しばかり大阪弁の川柳にこってはった。ほんでこの会話を聞きながら、ある川柳を思いついた。それはこうや。

むちゃ、こまい？ ええんよ うちのは 美乳やし

この川柳が、なんと「大阪弁川柳コンテスト」の特別賞をゲットしてな。30万円の賞金をもろたもんやから、その金であっちゃんを食事に誘うて、ほんで2人の付き合いが始まった言う訳や。先にホレたんはご主人様の方やけど、あっちゃんも最初からご主人様のことを心憎からず思てはったんやな。

2人が一緒になってから今年で6年になる。今でも2人は仲ええけど、あんたも知ってのとおり、2人の悩みはいまだに子どもが授からん言うこっちゃ。2人とも病院に行って検査も何度かして調べてもろたけど機能に異常はない。つまりはあんたのせいでもなければ嫁さんの畑のせいでもない。原因がようわからへんねん。

さて、天王寺の備前屋での与太話のことや。

結婚して3年目のことやったけど、ご主人様が阿倍野支店に転勤になって3ヶ月目に、JR天王寺駅北側のちょっとさびれた商店街で、立ち呑み「備前屋」を見つけて気に入り、それからこの店に頻繁に通うようになりはった。

備前屋はビルの4隅の1辺を長方形に切り取って暖簾をかけただけの店でな、入口のドアもなければ、当然ながらイスもない。常連客は冬も吹きさらしの中で寒さに震えながら焼酎をあおるんや。

けど、この店は活気に満ち溢れてた。20代後半から30代前半の威勢のいい兄ちゃんがいつも3人程いて、手際よう料理の注文や客を捌いて、当ての品数も多かった。陳列ケースには、刺し身から奴まで新鮮な品々が小鉢に盛られてて、常連客の胃袋を煽ったもんや。

備前屋の長方形の短い1辺は商店街に面してるんやが、そのコーナーにはいつも数人の常連客がたむろしてた。メガネをかけた痩せぎすの、藤田まことの顔を赤黒うしたような70年配のおっちゃんは、誰にもまして野太い声で皆の話をリードしてな。同年配の、谷啓に似てるけど、それよりもちょっときつめの顔付きをしたずんぐりむっくりのおっちゃんは、合いの手専門や。いつもケケケと奇妙な声で笑うてた。そこに30歳のぐらいの顔つきだけは端正な健太郎と呼ばれてた若いんが割り込んで話をませ返す。

こんな具合や。

「そのホタルイカ、うまそうやな。ひとつもらおか」

「おい、みっちゃん。酒くれるか。そんでみっちゃん、あのケースの中のあの棒みたいな貝、何やねん？ まで貝？ 聞いたことないな。旨いんか？ そりゃアそうやな、旨いからおいてるんやわな。いやいや、いらん。名前、聞いてみただけや」

「ほな、オレもらおか。オレ、初物食いやねん。どんなんか食べてみたら。ところでみっちゃん、まで貝でどこでとれるんや。海？ そんなんわかってるがな。道頓堀川？ 殺したろかおまえ。人が何も知らん思て、言いたい放題言いくさって」

「このホタルイカ、旨いな。この前、釣りに行ったときな、えさにホタルイカを使うたんやけど、船頭に『これ、食うてもええんかいな』て聞いたら、食うてもええよ言うから食うたんや。解凍しはじめててなア、なかなかあれも旨かった」

「魚に食わさんとおまえが食うたんかいな。たまらんやっちゃん、おまえは。魚釣らんとおまえが釣られてどないすんねん。ところで、魚は、何、釣りに行ったんや」

「ええと何やったかな。イカやったかな」

「えっ？ イカやったら友食いやんけ。ホタルイカでイカなんか釣るか？ おまえ、何、釣りに行ったかぐらい覚えとけよ」

「そりゃ、イカんな」

「座布団、没収」

「あははは。いやア、ホタルイカ当てに酒飲んでたら、酔うてきてな。実は、魚釣らんと船床で寝ててん」

「何や、釣り行ったんやのうて、酒くらいに行ったんかいや。酒やったらここで飲んでたらええのに。もったいないことすんなア」

ご主人様は常連客の話に加わる言うことはのうて、いつも1人、ビールや焼酎を飲みながらそのやりとりを遠くの方から聞いてはった。

話が政治談義から下ネタに移って芸能界に飛んだ思たら、また政治談義に立ち戻る。ガッハッハッと誰かが大きな声出して笑うて、それをヒヒヒと卑猥な声出しておっちゃんが受け、まさに三文話の洪水や。聞きながら、ご主人様も他の客もついその話につられてよう笑うてはったわ。

ある日のことや。ギューギュー詰め立ち宿ってるお客さんが勘定を払うて出て行ったその隙を狙うて、そこにご主人様が肩を入れ、どて焼きを注文してビールを飲んでたら、いつもの1角に、野太い声のおっちゃんとずんぐりむっくりしたおっちゃんが陣取ってな、そこに健太郎が加わっていつものように三文話の大洪水になった。ご主人様も興味を惹かれて、その話に聞き入りはったんや。

「健太郎。おまえは偉いな。酒、飲むまい思たら飲まんでも2日ぐらい平気なんやろ」

「おっちゃんと一緒にせんといてや。オレ、アル中ちゃうぜ」

「そういやア、おまえには嫁さんと小さな子どもが2人おったんやったな。おまえら共稼ぎやろ。そろそろこんだけ地価も下がったことやし、家でも買うたらどうや」

「そうでんねん。嫁さんがうるそうて。昨日も帰ったら何か絵図面のようなもん書いてるから、何してんねんて聞いたら、こんな間取りがいいなアって、家の間取りをせっせと書いてますんや。オレもしゃアないからつきおうて、1階はこうで2階はこうで、3階は子ども部屋にしようかなんて話し合ったんですわ」

「ホンマに女は家に執着するからなア。オレなぞは寝るとこさえありやア、それでええけどな。女だけの思いでローン抱えるのは男もたまらん。ところでおまえ、えらい早うに嫁さんと一緒になったんやな」

「まア、成り行き言うもんですわ。子どももできてもうたし。気性のやさしい女やったから。子どもができたらしゃアないですやんか」

「そんなことあらへん。墮ろしたらよかったやんか。健太郎んところはもう手遅れやったんか」

「おっちゃん、薄情なこというなア。オレ、子どものことでは嫌な思い出がありまんねん」

「へえ～、どんな話や。とっくり聞いたるから言うてみ」

「もう4、5年前のことやけど、深夜にオレのダチから公園までちょっときてくれて電話があったときのことですわ。ダチは池田辺りの国道171号線を根城にしてる暴走族の頭みたいなことしてたんやが、行ってみると公園のトイレにそのダチがいて、横で女が泣いてますねん。『どないしたんや』言うて聞いたら、そのトイレで子ども墮ろした言うやないですか。オレ仰天して、『なんでオレを呼んだんや』言うたら、『すまんけどあれ始末してくれ、コイツは泣いて何もでけへんしオレもたまらん。すまんがダチの誼で頼む。後生やから頼む。そう言いよるんですわ。何てこと頼むねんて思たけど、ダチには恩もあるからしゃアない。オレ、トイレに入りましたんや。そしたら便器の横に黒いナイロン袋があって、回りは血だらげや。便器の中にはピヨピヨがいてる。何か黒ずんでるけど表面はフワフワしてて、そんでも中はゴムみたいにグニャグニャ

してるみたいなんですわ。何か気のせいかも知れへんけど動いてる。目の錯覚かも知れへんけどピヨピヨが動いてますんや。オレ、それ見てびびってしもて。あれは何とも言えんかった。

オレが思わず外に出たら、女はその場にいることに耐えられへんかったんやろな、どこかに行っておれへんかったけど、ダチがオレを掴みますんや。こう、手え、震わせながら掴みますんや。もう、しゃアないですやんか。オレも肝すえて、トイレに引き返して、近くにあった新聞紙でピヨピヨをつまんでナイロン袋に入れたんですわ。新聞紙はすぐに水が沁みて何ともいえんかったけど、それをボール紙に頑丈にくるんで、紙テープでグルグル巻きにして、ゴミ箱にほかしたんですわ。ほかした後もいつまでもこの手にその感触が残ってて、そりゃア気色悪かった。おっちゃん、あんな経験したら、もう女に子ども堕ろせなんてことは絶対言われへんよ。それに病院で堕ろしたらあっこに傷はつかんけど、自分で無理からに堕ろしたら、もう2度と子どもを産めん体になってまうこともあるらしいし」

「ピヨピヨかいな。しかし、おまえらもたいがいやのう」

「おっちゃん、先走りて知ってるか」

「知ってるよ。チンチンが立ったら、いかんでも先っぽから何が出てるから、それで女をはらませることもある言うあれやろ。松方弘樹がどこかで言うてたな」

「イってしもて、あれがドバツと出たら、億いう精子が出るんやから、先走りでも1万匹ぐらいは出ますわな。ダチもエッチのときは気をつけてみたいやけど、その先走りて女をはらましてしもたんや言うてましたわ」

「しかし、オマエのダチも因業なやつちやなア。女にそんなことしていい思てんのかいな」

「けど、オレもあ那时候、ダチのこと、なんてことしくさるねん思たけど、立場が逆やったら、オレかて女に子ども堕ろせ言うたかもしれへん。ダチも本まもんの悪やないんや。そんでもあんなことした。人は後になつたらなんとでも言いよるけど、ああいうときはああいうことをしてしまうことがあるもんなんや。それはその立場に立たんとわからん。非難すんのは簡単やけどな」

なんとも惨い話やないか。そうやろ、あんた。これは間違いのう犯罪行為やで。けど健太郎の声は大きゅうて明るうて、まるで昨日、友達とドライブにでも行ったときのことを話すようやったから、その内容の異常さにもかかわらんと、この話を聞いてた近くの立ち呑み客からは、笑い声さえ上がった。

このとき、ご主人様が食べてたんは、何とも間の悪いことにどて焼きやった。ご主人様もこの場の雰囲気の中で、さしてこの話を深刻に受け止めた訳やなかったけど、どてやきのどろどろの液体の中に浮かぶこんにゃくや肉片がピヨピヨを連想させて、さすがにそれ以上食べる気がせえへなんだ。

まったく、人間以外で自ら墮胎する動物がいる言う話はこれまでわても聞いたことない。ホンマ、感情と理性を併せ持つヒトと言う動物の心言うもんは厄介なもんやで、なア、あんたもそう思えへんか。

健太郎らの話は、それから政治談議に移って、ボルテージも上がりっぱなしやったが、ご主人様は健太郎から聞いたピヨピヨの話になんどのう気が塞がれてしもてな。そりゃア、そやろ。ご主人様夫婦は子どもが欲しいゅうて欲しいゅうてたまらんのに、子どもはできへん。一方、作ろうとは思てへんカップルに子どもができてまう。まア、それが自然の摂理言うたらそれまでのことやけど、ホンマ、神様の気まぐれには困ったもんや。

そんでご主人様は早々に勘定を済ませ、いつものように環状線に乗りはった。車内はちょっと混んで、わずかな隙間に体を滑り込ませて座りはったんやが、次の新今宮駅で、隣りに座ってた2人連れが降りて、その代わりに25、6歳ぐらいに見える女性2人連れが乗ってきて、声を落としてヒソヒソ話をし始めた。

ご主人様は2人の様子が何か気になって、寝たふりをしながらその話に聞き入りはった。

「それでどうするんよ」

「墮ろすしかないやん」

「墮ろすって言ったってそんなこと、そう簡単にでけへんやんか」

「それであんたに相談してるんやないの。ええわね、あんたは正社員で。ウチはアルバイトやからそうするしかないんよ」

「え、正社員て何？」

「奥さんのこと。あんたはれっきとした奥さんやろ。ウチはおめかけさんみたいなもんやからアルバイト」

「ハハハハ、うまいこと言うやん」

「シー、笑い事やないんよ。そんな声出したら人に聞こえるやんか」

それを聞いて、ご主人様は、ここにもヒトがいる！ そう思いはったんやな、なんとも言えん顔して座席に坐ってはった。

それから何週間か後のことや。あれはご主人様が嫁さんと大ゲンカして、プチ家出をしたときのことやった。職場で嫌なことがあってな、家に帰って嫁さんにちょっと8つ当たりしたとこまでは大したことなかったんやが、つい言うてはあかん1言を言うてしもうた。それがわても驚くほどのドンパチに発展したんや。

もう2度とこの家になぞ帰ってくるか言うて啖呵を切って、ご主人様は家を出たんやけど、あんまり金をもってなかった。カードで通帳の残額を見たら、2万円とちょっとしかなかった。

これじゃ、飯食うて普通のビジネスホテルに泊まったら2、3日でペアになってまう。そう考えて、ご主人様は西成のあいりん地区の安ホテルに泊まることにしはった。

あいりん地区やったら、1泊1000円ぐらいで泊まれる安宿が仰山あるからな。昔、友達と一緒に興味本位で、あいりん地区の木賃宿に泊まった経験が、今頃、生きてきた言う訳やな。

晩飯を食わんと家を出たもんやから、腹が減ってしゃアない。あんたも知つての通り、あいりん地区の最寄駅は新今宮駅で、その新今宮駅は天王寺駅の隣や。ほんで、ご主人様は備前屋で軽う1杯飲んで、それから新今宮に行こうと考えはった。

ご主人様が備前屋で湯豆腐を当てにビールをチビチビ飲んでたら、店ん中がいつもと違うて静かなことに気イついてな。ほんで、いつもの常連客の指定席の方を見てみたら、ずんぶりむっくりしたおっちゃん1人やった。

残念やなア、今日は馬鹿話はお休みかいな、そうご主人様が思てたら、そこに健太郎が勢いよう暖簾を払うて店に入ってきた。それからはいつもの通りや。

「おっ、きたか、健太郎、どや、調子は？」

「何言うてますねん。昨日、ここで会うたとこやないですか」

「そりゃ、そうやが、話始めるんには皮切り言うもんがいるからな。まア、時候のあいさつみたいなもんや」

「さよか。ほなら、最近は、まア、墓地の散歩言うところだな」

「何や、それ？」

「ボチボチ言うことですわ」

「しょうもな。のつけから駄ジャレかい。けど、今のおもしろいな。おまえが考えたんか？」

「おっちゃん、大阪人やったら、誰でもこんなジャレ知ってんで。オレ、言いながら恥ずかしかったわ」

「ハハハ、ほうか。ここ大阪で人生70年も生きてきて、わしはまだ大阪人やない言うこっちゃんや。こりゃア、精進が足りんな。わかった。今日から、わし、健太郎のこと、おししよさんて呼ばしてもらおうわ。さア、おししよさん、まずは1杯」

「おっ、おっちゃん、奢ってくれるんか。そら、ごっそさん」

「アホか。1杯どうぞ言うただけや。勘定は別に決まってるやんけ。ところで、健太郎。おまえ、あれから、とっさんの消息、聞いてへんか？」

「そのことですねん。オレも気になって、あれこれ知り合いに聞き回ってはいるんやけど、誰も知りまへんねん。ホンマ、どこに雲隠れしてしもたんやろ」

「わしも八方手分けして捜してるんやけど、皆目わからん。ホンマ、どこ行ったんやろな」

「こんなことになるまで、オレ、知らなんだんやけど、とっさんは極道やったんか」

「そりゃア、昔のこっちゃ。確かに若い頃は、山口組系の浪速組で『若』て呼ばれてた時期があつてな。両肩から背中にかけて牡丹のモンモンいれて、難波の夜の街を肩で風切って歩いてた時代があつたんや。けど、組内のいざこざで傷害事件起こしてしもて、ちよつとの間ブタ箱に入つてな、それから改心して真つ当になつたんや。叔父貴が工務店経営してたから、そこで修行してな。叔父貴にも認められるようになってきて、ほんで50の声を聞いたときに、生野に店開いたんや。若い人も何人か使うようになってきて、あの聡もその1人やった。聡はわしも知ってるけど、あいりんでウロウロしてるところをとっさんに拾われた子やねん。とっさん、子どもいてへんから、聡のこと大層可愛がってな。その飼い犬に手エ噛まれたんやから、そりゃア、とっさんも頭にきたやろ」

「けど、そいつ、死なんでよかつたな。もし殺してたら、とっさん、一生、ブタ箱暮らしやで」

「せやな。聡の奴、とっさんの金盗んで女んどこへしけこんでるとこ、とっさんに見つかつて半殺しの目に会わされたらしいんやが、わしもとっさんの気持ちはようわかるわ。警察も事情知ってるし、聡もほつといてくれ言うてるらしいから、警察もあんまり熱心にとっさんを捜さへんとは思てるけど。早うほとぼり醒まして、帰ってきてくれたらええけどな。また、ここで馬鹿話しながら一緒に飲みたいわ」

「ホンマやなア、とっさん、どこへ行ってしもたんやろ。あいりんの安宿あたりを探したらいてるかも知れへんな」

(とっさん言うのんは、あの藤田まことによい似た野太い声のおっさんのことやろか)

そんなことを思いながら、ご主人様はもう少し健太郎らの話を聞きたい思たんやが、2本目のビールも底をついてしもてな。これから何日かあいりんに泊まること考えたら無駄使いはできへんよって、それ以上、備前屋で飲むことを諦めて、あいりんに行くことにしはった。

ご主人様を選んだんは「島屋」言う1泊1300円の安ホテルでな。3畳ほどの個室の中にあるんは卓袱台とテレビだけや。小窓がついてて、そこを開けたら30センチ向こうが隣のビルの壁やった。ジメジメして湿気が壁に染み付いてるような部屋やったな。

ご主人様は、部屋に入って、とうとうオレもこんな世界に足を踏み入れたんやなアとなんとも言えん気持ちになったけど、まだ、大丈夫や、まだ、墮ちてなんかいてへんと自分に言い聞かして、途中のスーパーで買った惣菜を当てに焼酎を飲んだ後、ホテルの共同風呂に行くことにしはった。

風呂場は大浴場とは名ばかりに狭うて暗いところでな。ご主人様がドアを開けたら、年のいった労働者風の男が1人、湯船の中で歌謡曲を口ずさんでた。肩から両腕の関節辺りまで、萎びて色あせてしもうてたけど、肌皺の中に牡丹の刺青があつてな。それ見て、ご主人様はビビッてしもた。けど、今更、風呂場から逃げる訳にもいけへんから、おずおず湯船に浸かつて、ようその男を見たら、なんと、さっきまで飲んでた備前屋で健太郎らが話してたとっさんやないか。

ご主人様は、驚いてしもて、何も言葉が出んでまじまじととっさんの顔見てたら、とっさんがこう言うた。

「あんた、わしの顔に何かついてるか？ あれ？ どっかで見た顔やな。あんた、わしとどっかで会ったことあるか？」

ご主人様は、備前屋では飲み客とほとんど話をしたことがのうて、もっぱら常連客の与太話を聞くだけやったし、立ち呑み言うところはあんまり客同士が顔を見合すことはないからな。とっさんはご主人様のことはぼんやりとしか覚えてなかつたんやな。

「あのう、私も備前屋によい行ってまして……」

「ほうか、備前屋か。それで思い出した。見覚えがあるはずや」

とっさんはそう言うて、急に安心したように人なつつこい顔して、ご主人様にこう話しかけてきたんや。

「ほんで、にいちゃん、景気はどうや」

「さっぱりですわ」

「にいちゃん、サラリーマンか？」

「そうです」

「昔はそんなことなかつたんやが、ここんとこあんたみたいなサラリーマンも、ここらの安ホテルによい泊まるようになってきたなア。やっぱり世の中、不景気なんやなア。あんたも会社に、出張費、削られてんのか？」

ご主人様が黙ってたら、とっさんは唐突にこう言うやないか。

「にいちゃん、金貸してくれへんか？」

風呂場の中はご主人様ととっさんの2人だけや。

(腕力でオレに勝てるやろか)

思わず、ご主人様はそう自分自身に問いかけてみはったんやったが、とにかくまずは断ろ思て、「すみません。とても人に貸せるほど、金もってませんねん。オレ1人がここに泊るのが精一杯です」言うて答えたら、とっさんが湯船から急に立ち上がってな。

ご主人様が風呂ん中で思わず後ずさりながら身構えたら「にいちゃん、せいぜいきばりや」そう言うて湯船を出て、カ一杯タオルを絞り、ドアを叩きつけるように強う引いて、脱衣場に出て行ったんや。

ご主人様は安堵に胸をなでおろして、大きゆうため息をつきはったんやが、急に思いつくことがあってな。急いで風呂を出て脱衣場のとっさんにこう声をかけた。

「あのう、ちょっとお聞きしたいことがあるんですが、部屋にお邪魔したらあきませんやろか。5000円ぐらいやったらなんとかなりますよって」

それから、ご主人様はとっさんの部屋で一緒に安酒煽りながら、とっさんから話をあれこれ聞いたんやった。

次の日の朝、朝早うにホテルを出、あいりん職安の前を通って、ご主人様は新今宮駅に向かいはったんやが、職安の前を通ると、古びて擦り切れたナツパ服や作業着を着た、大きなズダ袋や紙袋を持った若いんから年寄りまでの労務者が3列になって、大蛇がとぐろを巻くように職安を取り巻いててな。それを見ながらご主人様は、前の日の嫁さんとのドンパチやとっさんの話を思い出し、こんなところにおらんと一刻も早う嫁さんに会いたい言う思いが募ってきて、新今宮駅の方に小走りに急ぎはったんやった。

なんで、今日、あんたにこんな話を聞いて欲しかったんか言うと、それはこういうことやねん。ご主人様が嫁さんとドンパチやってプチ家出したときのことやけどな。あんとき主人様は、一生誰にも言わんとこ思ってたことを、嫁さんに向こうてついこう口にしてしもたんや。

「おまえは、昔、子ども墮ろしたことがあるやろ。それがおまえに子どもがでけへん原因やないんか！」

嫁さんは一瞬怯んだ思たら、顔真っ赤にして、「そんなこと誰に聞いたん！ どこで調べたん！ 泥棒猫みたいなことして！ なんであんたにそんなこと言われなあかんの！」言うてプチ切れた。

実はな、嫁さんが子どもを墮ろしたことがあるんをご主人様が知ったんは、備前屋でピヨピヨの話聞いた日の1週間後のことやった。嫁さんに内緒で夜遅うに「よってや」に行きはって、客がみんな帰った後にママにこうかまをかけたんや。

「うちのんが妊娠せえへんのは、昔、子どもを墮ろしたことが原因やないやろか？」

「あんた、なんでそのこと知ってんの？ 誰から聞いたん？ けど、確かにあのことは影響してるかも知れんわね。あっちゃんも、ホンマ、アホなことしてしもて」

ご主人様は、嫁さんの口から結婚する前に、暴走族に入ってたワルと付き合ってたことがある言うことを直接聞いてたけど、子どもを墮ろしたことまでは知らなんだ。

けど、ピヨピヨの話を聞いて何か気になってしもてな。話に出てくる女が嫁さんのことやと考えた訳やないけど、そんな過去があってもおかしい言う思いが心の中で膨らんでどうしようものうなった。ほんで、ご主人様はママなら知ってるかもしれへんて思いつきはったんやが、正直に聞いても答えてはくれへんやろから、かまをかけた言う訳なんや。

このことであっちゃんを責めてはあかんよ言いながら、ママは知ってる限りのことを教えてくれた。その話を聞きながら、健太郎のピヨピヨの話に出てくるダチの女言うんは、ひよっとしたら嫁さんのことやないか、そうご主人様は思いはった。

健太郎のダチが暴走族やったこと、嫁さんは暴走族に入ってたワルと付き合ってたこと、そいつは国道171号線の池田付近を根城にしてたこと、嫁さんも池田に住んでたこと。あまりにも状況が符号してるやないか。

事実は小説より奇なり言うけど、世の中にこんなことがあってええもんやろかご主人様は心臓が止まりそうやった。けど、こんな偶然がある訳ない。人違いに違いない。そうも思い返し、最後はいまさらそのことをはつきりさせたところでどうなるもんでもないと思いつき定めて、このことは、一生、自分の胸ん中に仕舞いこんどこうと心に誓いはったんや。

それが嫁さんとのドンパチのとき、あんまり腹立ったからつい口に突いて出てしもた言う訳なんや。

ところで、あいりんでのとっさんとの話やけどな。なんであんとき、ご主人様がとっさんに声を掛けはったか言うと、ママから聞いた話は、一生、胸にしまっておこうと思いつき定めたものの

、反面、ご主人様は割り切れんモヤモヤした思いに苦しめられてて、事実を知ったからどうなるもんでもないことはわかってはったけど、せめて真実だけでもはつきりさせたい、とっさんなら何か知ってるかもしれん、そう思いはったからなんや。

ほんでとっさんに話を聞いてみると、やっぱり健太郎のダチの女は嫁さんやった言うことがわかった。とっさんは健太郎のダチにも健太郎を介して2度ほど会うてて、ピヨピヨの話もよう覚えてた。

おまえはえぐいことしたんやなア、ほんでその後、その女とは別れたんか。ほうか、で女は今どこにおるねん。池田の立ち呑みやってる叔母さんところに預けられてんのか。おまえ、その女に未練があっても、もう会いに行ったらあかんぞ。てなことを、とっさんは健太郎のダチに話したそうやった。

ご主人様はその話を聞いて、頭ん中のモヤモヤした思いは消えたけど、反面、オレは嫁さんの傷口をえぐるような、なんてことを言うてしもたんや、そう後悔の波が次から次へと押し寄せてきてな。とっさんの前で人目もはばからんとオイオイオイ泣きはったんや。

後悔先に立たずとはよう言うたもんでな。ドンパチがあってあいりんに泊まった日の翌日、家に帰って、知ってることの全てを話し、誠心誠意、嫁さんに謝って、嫁さんもそのことをあんに黙ってて悪かった言うて2人して抱き合っ泣いたんやったが、ご主人様の言葉で嫁さんの受けた傷はホンマに大きかったで。

嫁さんは、さっぱりした人やから、そのことでグジグジ悩むようなことはなかったけど、それからというものの、2人の関係がなんとのうぎこちのうなってな。わても2人の間に隙間風が吹いてると感じるこがようある。

それからというものの、子どもの話題を極力避けるようになってきてな、最近はもう子どものことは諦めんとしゃアない言う気持ちに2人ともなってしもてる。

けどな、まだ諦めるんは早い。わてにはそれがようわかる。わてには特殊な予知能力が与えられててな、それをご主人様に伝えることはでけへんけど、わてにはわかるんや。あんな形で子どもを墮ろしたんがもう妊娠でけへん原因やとご主人様も嫁さんも思い込んでるけど、それは違う。嫁さんの体はすっかり元にもんてる。あとはタイミングの問題だけなんや。実はな、そのタイミングが嫁さんの今度の月のもんが過ぎた後にくる。そこで、あんにお願いがあるんや。

あんなはご主人様の不肖の息子やけど、きばるときはきばらなあかん。わては、ご主人様の脳みそによ頼んで、ご主人様がしばらく嫁さんとエッチをせんよう仕向けて、ほんで今度の月のもんが終わった後の4日目にご主人様をたきつけるようにするよって、あんなはそんときに、これまでにないうぐらい一気に、何億いうおたまじゃくしを嫁さんの大事なあそこに1杯送り込んで欲しいんや。

下手したらホンマに今度が最後のチャンスになるかもしれん。あんなはご主人様から結構遠い位置にいてるから、何を考えてるかようわかってへんやろけど、ご主人様は心の底から嫁さんのことを好いてる。

ピヨピヨの話はちょっとえぐかったかもしれんが、それも考え方次第やで。先走りなんてな話が出てたけど、2人の体のタイミングさえおうたら、ちょっとした拍子に妊娠する言うことが確か

にある。

ご主人様には、嫁さんと一緒になったあの頃の嫁さんへの熱い思いや、あいりんでの経験とそのときの改心した思いなんかをあれこれ思い出してもらって、今度の月のもんが終わってから4日後に、嫁さんのことを深く愛して欲しい、わてはそう心から願てんねん。

なア、あんた。あんたもわてもご主人様の1部なんやから、お互いにせいでい協力しようやないか。

くれぐれも頼んだで。

ところで、おまえは誰やって？ 1月、2月の月のことを英語で何言うか知ってるか。そう、そう、それや。イヤー。わてはご主人様の耳やねん。

(了)

ピヨピヨ

<http://p.booklog.jp/book/53480>

著者：田中かわず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/1121abc/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53480>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53480>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ